

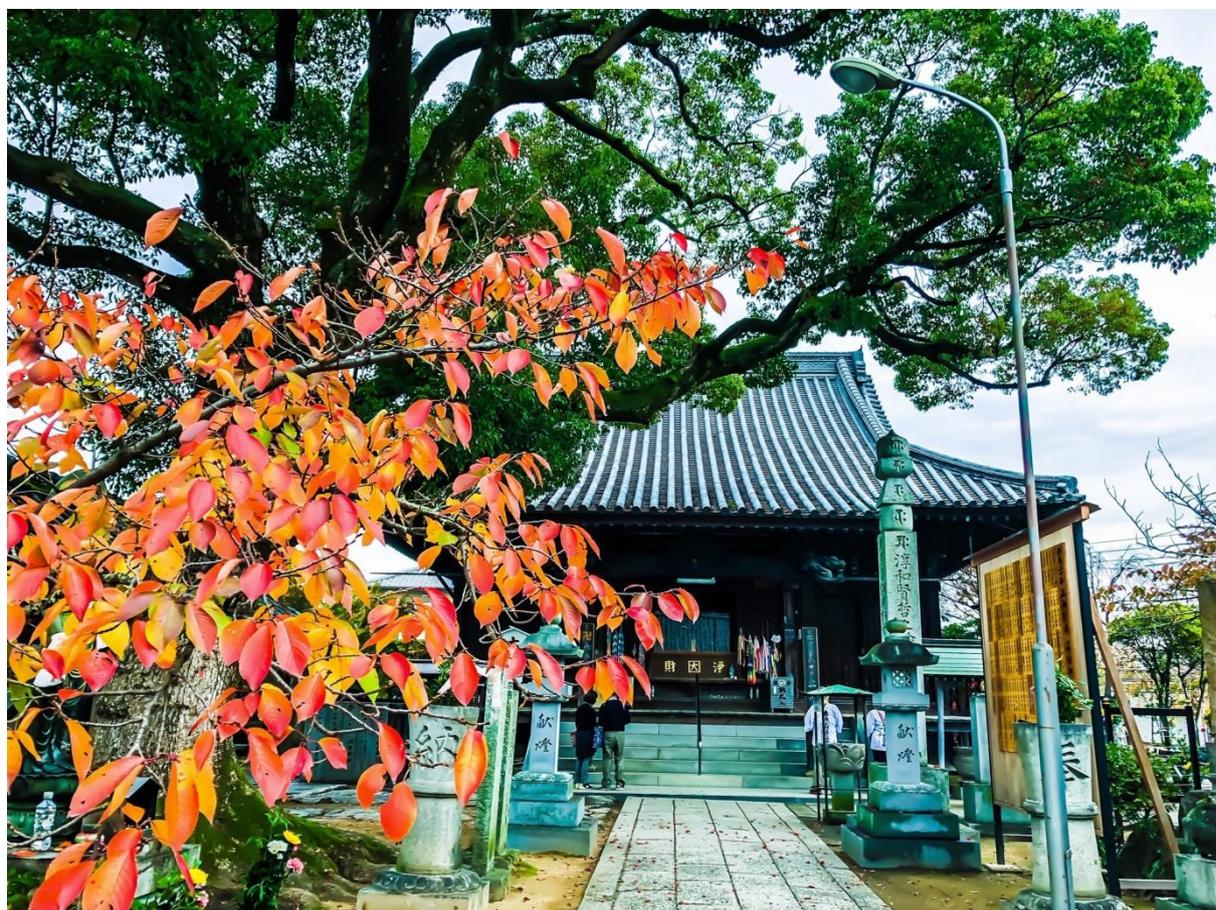
文化財学習会

# ふるさと探訪

テーマ ことでん一宮駅から旧金毘羅街道を歩く

講師 安田 正彦（一宮コミュニティ協議会 会長）

日時 平成30年12月16日（日）



共催

高松市歴史民俗協会

高松市文化財保護協会

高松市教育委員会

# 目次

1	一宮町	・	・	・	1
2	潜水橋	・	・	・	1
3	大禹謨	・	・	・	3
4	金毘羅道・遍路道・讚岐国往還	・	・	・	4
5	一宮寺	・	・	・	7
6	辻堂池	・	・	・	9

# 1 一宮町

一宮町は、香東川中流域の右岸に位置し、東は仏生山町・三名町、西は円座町、東は寺井町・香川町、北は鹿角町と接します。地名の一宮は、讃岐国一宮の田村神社鎮座地であることに由来するといわれています。明治二十三（一八九〇）年二月に、一宮・成相（成合）・鹿角・三名村の四つの村が合併して香川郡一宮村が成立し、旧村名を継承した四大字を編成しました。辻堂池・行寺池・新池の三つのため池を灌漑用水とした米作を中心とした地域でした。

昭和二年（一九二七）、高松～琴平間に現在の高松琴平電鉄琴平線が全線開通し、同時に一宮駅が開設されました。昭和三十一年九月五日に、南接する香川県寺井地区の一部を編入し、大字として寺井を加えました。そして、同年九月三〇日に高松市の一部となり、村制時の五大字は、町名として継承されました。

# 2 潜水橋

潜水橋は、潜り橋、沈下橋、潜流橋など様々な呼び方があります。特徴としては、普段水が流れているところにだけ架橋され、土地と同程度の高さになっていることから、定水

位の状態では橋として使えるものの、増水時には、水面下に沈んでしまうことが挙げられます。また、潜水橋には欄干（手すり）がありません。これは、洪水で橋が沈下することを想定し、水の抵抗を受けにくくするほか、流木等が欄干に引っかかり、水の流れが悪くなることを防ぐためです。潜水橋は、あるがままの自然を受け入れ、共生していこうとする人々の生活様式の象徴ともいえます。高知県の四万十川に架かる佐田沈下橋や岩間沈下橋が特に知られています。高知県では、四万十川に架かる四十八橋について、「四万十川沈下橋保存方針」を策定し、生活文化遺産として後世に引き継ぐこととしています。

対義語としては、増水時にも橋として使うことができる「永久橋」「抜水橋」があります。架橋技術の進歩により、山間部にも本格的な橋が造られていることや、慣れているはずの地元住民といえども転落事故が絶えないことから、永久橋に架け替えられていき、潜水橋は徐々に姿を消しつつあります。

### 3 大禹謨

大禹謨とは、中国の史書『書経』の中に見られる言葉で、一般的には「偉大な禹のはかりごと」と解されています。「禹」は、中国黄河の治水に尽くした禹王を指します。

大禹謨の碑を作ったのは、西嶋八兵衛といわれています。西嶋八兵衛は、江戸時代、香東川の大改修を行い、大野郷（高松市一宮団地付近）から二股に分かれていた川の流れのうち、雨が降るたびに洪水を起こしていた東の流れ（城下町付近を通っていた）を堰き止め、西の流れ一本にしました。その折に、禹王にあやかり安全を祈願するため、大禹謨碑を建てたとされています。

その後、大禹謨の碑はすっかり忘れられていましたが、大正元年（一九一二年）に香東川で起きた大洪水により決壊した上中津の復旧工事中に、住民が偶然この碑を掘り起こしました。その後、この碑に字が掘られていることに気づき、川沿いの旧・安原街道にある薬師如来の隣に安置されました。しかし、再びこの碑は顧みられなくなっていたところ、「一宮村史」の調査に携わっていた平田三郎氏（元四番丁小学校校長）が、川部橋北三百メートル右岸である草むらでこの碑を発見し、さらに「大禹謨」と刻まれていることに気づきました。この石碑を調査したところ、「大禹謨」の筆跡が西嶋八兵衛のものと似ていること

が判明しました。さらに、昭和三十六年（一九六一）に元栗林公園所長の藤田勝重氏が大禹謨の存在に気づき、この貴重な碑がもう二度と見失われないように適切な保全をお願いしました。そして、関係者一同の熟議の末、翌年に由緒深い栗林公園の商工奨励館の中庭に遷座することとなりました。また、大禹謨の保全と顕彰を図るため、県立香川中央高校の野球バックネットの裏にあたる道端に「中津の薬師堂」「牛の墓」と並んで大禹謨のレプリカが置かれています。

## 4 金毘羅道・遍路道・讃岐国往還

さぬきのくにおうかん

### 【金毘羅道】

各地と金刀比羅宮を結ぶ参詣道として整備された街道のうち、特に利用が多かった丸亀・多度津・高松・伊予土佐・阿波へ向かう道を「金毘羅五街道」と呼びます。高松道は、起点を高松城外掘にかけられていた常磐橋（現在の高松三越付近）とし、栗林、円座、滝宮、岡田、榎井を経由し、琴平に至ります。特に高松初代藩主松平頼重の入部以降、歴代藩主が金毘羅参詣を繰り返したことに伴い整備され、街道沿の町は宿場町として賑わいま

した。

また、「金毘羅五街道」以外にも金毘羅へ通じる脇道が県内にいくつもありません。脇道には、金毘羅を示す道標や石造物も多く残っており、地元の人がよく利用した道でもあります。一宮字仲島の三叉路の内側には、地藏堂と道標が残っています。地藏尊の台座石に享和元年（一八〇一）の刻銘が見え、北面に「西は丸亀道、東は白鳥道」東面に「此方こんひら道」と記されています。

### 【遍路道】

遍路道は、弘法大師空海ゆかりの霊跡を巡る巡礼道です。国籍や宗教・宗派を超えて誰もがお遍路さんとなり、地域住民の温かい「お接待」を受けながら、供養や修行のため、また、救いや癒しなどを求めて巡礼をします。一番から八十八番まで番付けされた各札所寺院には規模の差はありますが、並列的な位置付けであり、全体もしくは一部を代表する霊場はありません。

江戸時代になり、社会が安定したことを背景に庶民による巡礼が一般化し始め、案内書



が刊行され、道標が整備されるなど、道の固定化が進みました。全長約一四〇〇キロメートルの四国遍路の道は、信仰の道であるため、けもの道のような細く整備されていない道や、既存の官道（往還）が充てられた場合もあります。第八〇番国分寺く第八十三番一宮寺の遍路道も讃岐国往還と重複しています。一宮字仲島の三叉路の内側には、金毘羅道への道標のほか、「 国分寺  一之宮」と遍路道を記した道標があります。

## ★道標

旅人の道程の目安とされていたもので、道の分岐点に立てられることが多く、標柱の側面を東西南北に見立て、それぞれの側面に各道の行先を記したとされています。道標は、幕府の指示によるものではなく、道に関わって生計を立てていた運送業者をはじめ、沿道民や街道を利用して寺社参詣を行っていた講中らが、道心・馬などに感謝の意を表し、道中の安全を祈願する対象として私的に設置されました。遍路道や金毘羅参詣道に関する道



標が数多く残り、「手形」や「右・左」など、札所への案内表記が認められるものが見られ、現在も利用されています。

### 【讚岐国往還】

讚岐国往還は、古代の官道である南海道の系譜を引く道です。讚岐国往還は、多くが他の街道と重複し、一宮寺く国分寺は遍路道と重複します。讚岐国往還は、香川県を東西に横断する最短ルートでもあり、現在でも交通量の多い道筋となっています。

## 5 一宮寺

一宮寺は、飛鳥時代の大宝年間（七〇一〜七〇三）に義淵僧正が創建したといわれています。当初は「大宝院」と称した法相宗の寺でした。和銅年間（七〇八〜七一五）に諸国に一宮が建立された時、讚岐一宮として田村神社が建立されたことに伴い、その第一別当寺となり、寺号を一宮寺と改めました。後に弘法大師が滞在し、聖観音菩薩を刻んで本尊として安置し、同時に真言宗に改宗しました。



延宝七年（一六七九）年には、藩主の松平氏により神仏分離を命ぜられ、明治の神仏分離令よりも約二百年前に独立寺院となりました。現在、四国霊場第八十三番札所として多くの参拝者が訪れています。

本堂には、弘法大師作といわれる聖観音菩薩があり、右側には、「二宮のお大師さん」として親しまれる大師堂があり、天井一面に先祖供養・家内安全を祈願した吊灯笼が納められています。大師堂の隣には、平成十八年に落慶した護摩堂があり、不動明王像を拝顔することができ、一宮寺では、毎月二十八日（不動明王の縁日）の午前十時から護摩供が行われています。護摩堂の正面にある石灯笼は、京の名工である西村金造氏の作で、地面に八角形に配置され縁起のよさを表しています。仁王門両脇には、都の仏師・赤尾右京作の仁王尊立像があり、さらに旅の道中安全を祈願する意味が込められた大わらじが奉納されています。



## 6 辻堂池

辻堂池は、平地に造られた皿池であり、戦国時代の末期に行司市正が築いたと伝えられる行寺池と共にその役割を果たしています。

辻堂池の築造年代は定かではありませんが、「松平藩時代に入ると、新田開発の進展に伴って既存の出水やため池では灌漑用水がまかなえなくなり、行寺池の増改築や辻堂池の築造が行われた。(中略)これにより、寺井、一宮、三名及び鹿角各村の水利は著しく改善され、多くの田地を美田と化し、豊かな実りをもたらした。」と行寺池の沿革に書かれています。

築造以来、ため池関係者は維持管理に努力し、補修を行ってきましたが、老朽が著しく、豪雨時の堤防決壊も憂慮される状態となったため、平成元年から五年をかけて全面改修しました。

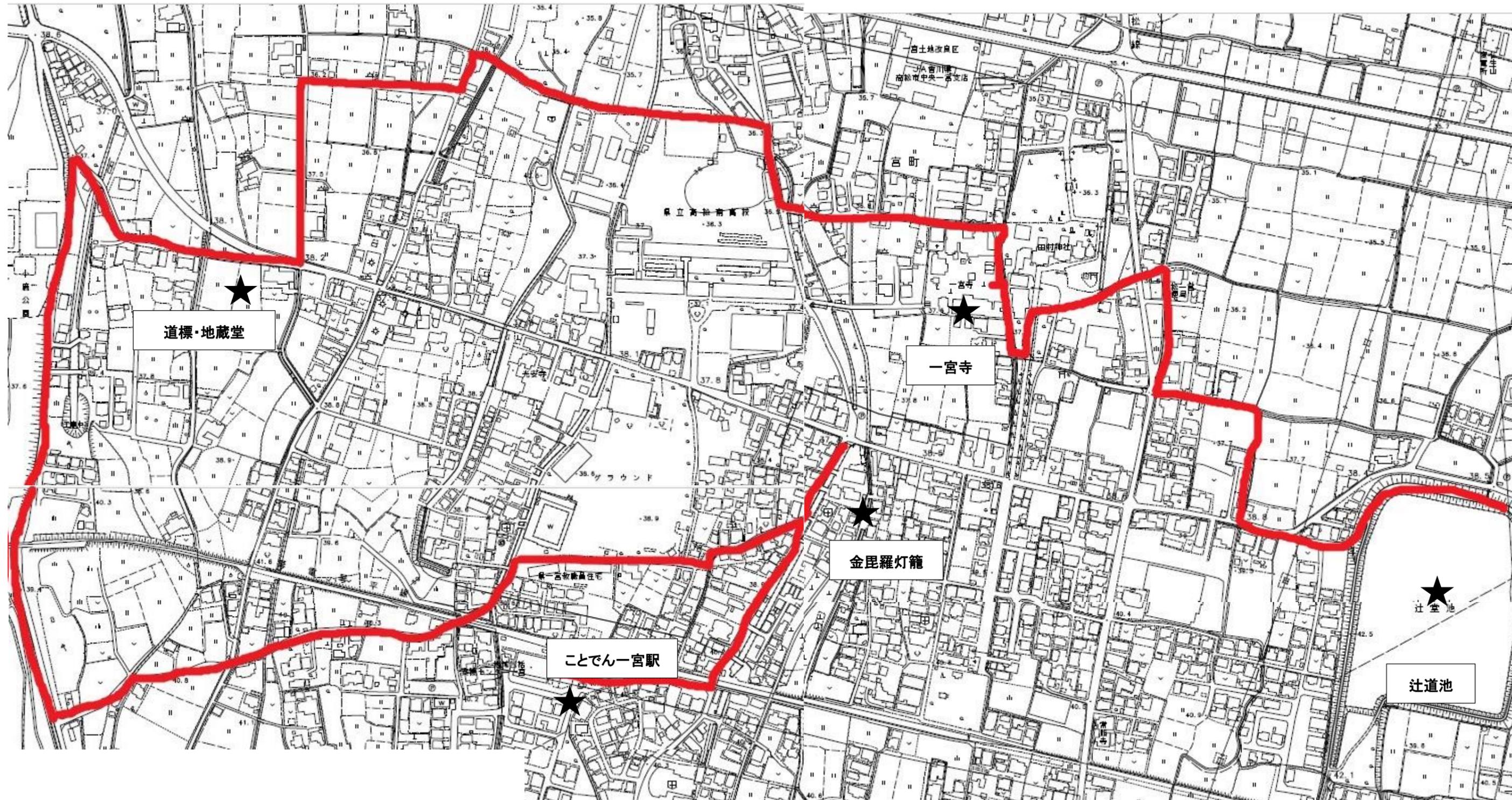


## 参考文献

- 『一宮郷土誌 現代編』平成二十八年、一宮郷土史編集委員会
- 『香川県「歴史の道」整備活用総合計画報告書第一集』平成二十三年、香川県・香川県教育委員会
- 『香川県「歴史の道」整備活用総合計画報告書第二集』平成二十四年、香川県・香川県教育委員会
- 『四国八十八箇所霊場と遍路道検討状況報告書(資料集)』平成十九年
- 『わが町の文化財探訪』昭和五十九年、高松市文化財保護協会
- 『歩き遍路のための「四国遍路」巡礼マップ 第八十三番 一宮寺』平成二十九年、文化庁
- ミツカン 水の文化センター ホームページ「大禹謨発見のドラマ 高松・栗林公園と西嶋八兵衛」  
<http://www.mizu.gr.jp/kikanshi/no40/08.html>
- 一宮寺 公式ホームページ  
<http://www.sanuki-ichinomiya.ji.or.jp/>



# ふるさと探訪「ことでん一宮駅から旧金毘羅街道を歩く」探訪ルート（修正版）





12月16日(日)復路

◆ことでん琴平線 空港通り駅

上り/下りとも 12:19 発 (※一宮へ行く場合のみ 12:04 発)

## ❖ 次回のふるさと探訪は…

◎テーマ:「香西氏の史跡を訪ねる」(予定)

◎と き:平成31年1月20日(日)午前9時30分～正午頃

◎集合場所:宇佐八幡宮 正面の鳥居付近(香西本町465)

◎講師:立山 信浩さん(『笠居郷探訪』著者)

◎探訪先:・藤尾城跡(宇佐八幡宮)

・芝山城跡(芝山神社)

・万徳寺 等

★当日、万徳寺隣の香西寺では大護摩が行われます。

◎参加費:無料

～注意～

☆公共交通機関を御利用ください。

☆広報「たかまつ」1月15日号に開催案内を掲載予定です。

(ホームページでは、より詳細な開催案内や過去の資料を御覧いただけます!)

☆小雨決行。当日、警報が発令された場合は、中止とします。

なお、中止かどうか御不明な場合、午前7時30分～9時30分に文化財課(Tel 087-839-2660)でお知らせします。電話が通じない場合は実施予定ですので、集合場所にお集まりください。



← ふるさと探訪(1月)ホームページへ!

# 「ふるさと探訪」に 参加される皆様へ

※参加中は、次のことに充分留意し、意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。  
(必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、  
道路の端を一列で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気を付けましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつけましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。